

トピックス

バイोजパン2012ワールドビジネスフォーラムが2012年10月10日～12日にパシフィコ横浜で開催されました。「アジア発オープンイノベーション新時代」と題して、多数のセミナーやアカデミックシーズ発表会、バイオベンチャー中心の発表の場が企画されました。製薬協も主催団体の1つとして参加し、製薬協加盟会社から多くの方々が発表するとともに、多くの会社・団体がアライアンスブースを出展し、アカデミアやベンチャーなどと面談するなど、活発な交流が行われました。また、ノーベル医学・生理学賞受賞の山中伸弥教授はご多忙にもかかわらず、予定通り「iPS細胞研究アップデート」と題する講演を行い、会場は盛り上がりました。

「バイोजパン」はわが国の国際バイオ総合イベントであり、今年で14回目を迎え、従来の日経BP社に代わって(株)ICSコンベンションデザインが運営責任を担うことになりました。主催は一般財団法人バイオインダストリー協会が中心の製薬協を含めた8団体からなる組織委員会で、多くのプログラムが組まれました。「アジア発オープンイノベーション新時代」の主題のもと、多数のセミナーやアカデミックシーズ発表会、バイオベンチャー中心の発表の場を通して活発な交流がありました。直前に中国からの参加が取りやめになるということもありましたが、アカデミア、バイオベンチャー、バイオクラスター、行政関係者、製薬・化学・食品などの各企業から多くの参加がありました。出展・パートナー参加企業数541社、パートナー参加者数は約900名、来場者数は12,000名を超え、昨年比べて大幅増でした。アジア最大級のマッチングイベントとなった今回のバイोजパンでは、内外の多くの大手中堅製薬企業に加えて、グリーンイノベーション分野の企業・機関が多数参加したことは特筆に値することでした。さらにバイオベンチャー、アカデミアの参加も過去最大となりました。

バイोजパン2012 基調講演

開会式後、基調講演として、まず「アジア発オープンイノベーションの可能性」と題して手代木功製薬協会長が英語で講演し、「日本はアジアの他の国々に優れた医薬品・医療技術を提供し、アジアとともに発展することが求められている。日本は創薬能力を持った国であるが、創薬には大学、バイオベンチャーおよび政府との協力が欠かせない。アジアにはバイオクラスターが形成されているところはいくつかあり、得意分野を生かしている。アジアは人口が多く、距離的にも

(写真提供：バイオインダストリー協会)



展示会場ならびにアカデミックシーズ発表会

近く、密な連携が可能である。アジアから革新的な医薬品を提供することを目的として、製薬協ではアジア製薬団体連携会議を2012年に開始した」と、アジアにおける創薬の可能性に言及しました。

次にAndrew von Eschenbach氏 (President, Samaritan Health Initiative <元FDA長官>)は、「21世紀の科学における解の創造」と題して、以下の通り講演しました。「ライフサイエンスへの投資によって21世紀の社会は大きな利益を享受できる。病気の発生から進行までのすべてを理解することは医療にとって画期的で、metamor-phosisと呼んでいる。ライフサイエンスの理解からDiscovery、Development、Deliveryの3つが加速し、輪につながっていくことが成果を生む。この輪の中で重要な知的資産の強化を図りつつ、立場の違う者たちがこの輪を加速することが必要である。大きな成果のためにはチームとしてのグローバルな“競争的コラボレーション”が必須であり、3つのDを回し、各コンポーネントを作り、解を見出すデザインを考えるべきである」と、やや難解ではあるものの、哲学的ともいえる興味深いものでした。

3人目の小林喜光氏 (株式会社三菱ケミカルホールディングス取締役社長)は、「三菱ケミカルホールディングス

(写真提供：バイオインダストリー協会)



ライフイノベーションサミットでのパネル・ディスカッション風景

(写真提供：バイオインダストリー協会)



展示会場の1コマ 集客力の大きかったロボット展示

グスのライフ・グリーンイノベーション」と題して、「弊社は機能商品、ヘルスケア、素材の3本柱の会社で、技術、利益および社会性という観点から、オープンイノベーションとオープンビジネスを組み合わせることで価値の高い事業を作り出している。研究もビジネスもコラボレーションが重要で、その際にはクローズドとオープンの組み合わせが必要である」と、各種の世界的な問題に会社としてどう貢献するか、その可能性を差別化とイノベーションで追究していると強調しました。

ライフイノベーションサミット

研究開発委員会委員でもある山崎達美氏(中外製薬副社長)がバイオインダストリー協会 運営会議議長として、主催者セミナーの1つである「ライフイノベーションサミット」のコーディネーターを務め、「イノベーションによる課題解決国・日本の構築と世界への発信」のテーマのもと、まず5人の演者の講演がありました。演者と講演の要旨は次の通りです。

松元洋一郎氏(医療イノベーション推進室長)：日本ではアカデミアのシーズが製薬につながっていない。日本の最高水準の医療をジャパンケアモデルとして世界に発信したい。

奥村直樹氏(総合科学技術会議議員)：総合科学技術会議では科学技術イノベーション政策推進専門調査会のもとに3つの協議会を設置して、2013年度のアクションプランを決定したところであり、重点的な取り組みを各省庁に求めている。

中鉢良治氏(日本経済団体連合会産業技術委員会共同委員長)：日本には司令塔がない。ゼロリスクシンドローム(リスクを取らない)、科学に対する認識の違いがある。これらに加えて人材の育成に関する大きな課題がある。

野木森雅郁氏(製薬協副会長)：製薬産業は社会に3つの貢献をしている。開発期間の短縮を達成しつつあるが、コストが上昇する中、医療イノベーションに向けて、基礎から臨床までの産学官連携、オープンイノ

ベーションを含めたアライアンスが必要である。

永山治氏(バイオインダストリー協会理事長)：医療の3つの柱は、Prevention、Intervention、そしてRehabilitationであり、これまでは主にIntervention中心に資源を費やしてきたが、今後、他の2つも重要度が増し、バランスのよい資源投入で、国民ができるだけ健康な状態を維持し、なんらかの社会活動に参加することが重要となる。

続いて、演者によるパネル・ディスカッションが行われました。

山中先生も参加したバイオジャパン2012

2012年度ノーベル医学・生理学賞を受賞された山中伸弥京都大学教授は、例年「iPS細胞研究アップデート」と題して講演を担当しています。本年は出席が危ぶまれましたが、キャンセルすることなく、宮田満氏(日経BP社特命編集委員)との対談形式で考えを述べました。主な内容は以下の通りです。①iPS細胞のできる仕組みに関する基礎研究に加えて、再生能力の誘導に取り組みたい。②iPS細胞を用いた再生医療と創薬について、リスクとベネフィットのバランスで考え、リスクをとらえる方法と対策を予め用意したい。③iPS細胞の産業化を考えると、分化させた血小板および赤血球の利用が挙げられる。

今回は、基調講演とライフイノベーションサミットに絞った報告となりましたが、会場では大学の出展とミニ発表会の場が多く用意されており、若手研究者も多数発表していました。

産学官連携がうまくいっていないという指摘もありますが、比較的規模の大きいバイオジャパンが産学官連携に関して一定の役割を果たすことが期待されます。

次回の「バイオジャパン2013」は2013年10月9日(水)～11日(金)、パシフィコ横浜で開催されます。

(研究振興部長 吉田 博明)